

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性

井筒（成田）美津子

1. はじめに — 義務的（根源的）意味から認識的意味へ

これまで助動詞の意味変化は、「義務的（根源的）意味から認識的意味へ」という一定の経路を辿るとされ、この変化は単方向性仮説 (unidirectionality) を示す現象の一つとして扱われてきた。例えば、*must* は「許可」の意味を表わす **motan* の過去形 (*moste*) に由来するが、「義務」の意味は 15 世紀に確立し、「推量」の意味が確立したのは 17 世紀頃であると言われている (OED *must*、小野 1969 : 155、Traugott 1989)。

Traugott (1989、1995) は、この義務的意味から認識的意味への変化を主体化 (subjectification) の代表例として挙げ、この意味変化を「意味が次第に話者の主観的信念や態度に基盤を置くようになる傾向」として特徴付けている (1995 : 47)。また、Sweetser (1990) は、認識的意味は義務的意味（彼女の言葉では、根源的意味）からの比喩的拡張であるとし、助動詞の意味変化について次のように主張している。

My proposal is that root-modal meanings are extended to the epistemic domain precisely because we generally use the language of the external world to apply to the internal mental world, which is metaphorically structured as parallel to that external world.

(Sweetser 1990 : 50)

つまり、根源的意味から認識的意味への拡張は、外的世界を表わす言葉を、比

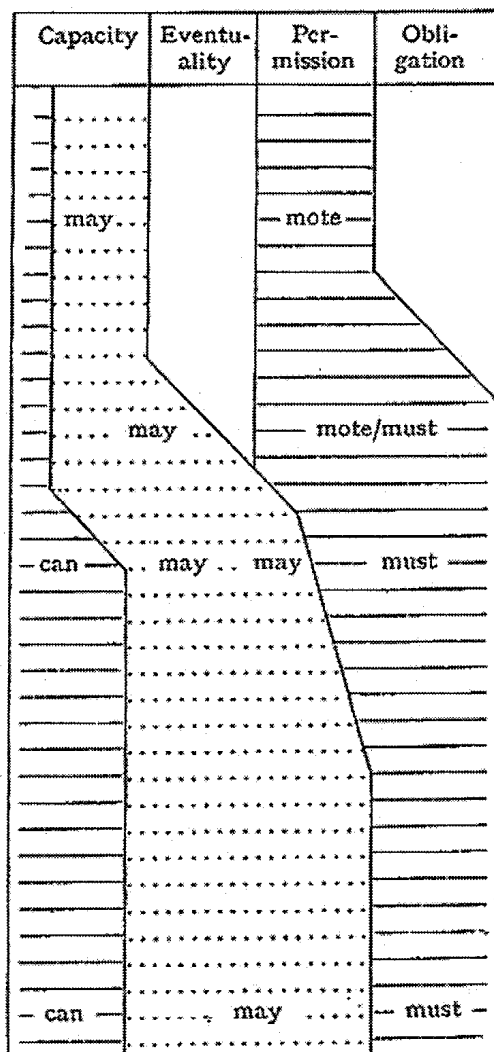
喩的に似た構造を持つ内的世界に適用するために生じるというのである。具体的に *may* の意味変化を例に Sweetser の主張を説明すると次のようになる。Sweetser は、まず *may* は「許可」を表す根源的意味から「可能性」を表す認識的意味へ変化したと想定し、許可の意味は、Talmy の force-dynamics に基づく分析から「社会物理的領域において潜在的な障害が無いこと」を表わすと述べている (Sweetser 1990 : 59)。そして、この根源的意味の一部の「潜在的障害の不在」という図式的構造 (image-schematic structure) が認識的領域に写像され、「ある前提から帰結への推論過程を妨げる障害が無い」という可能性の意味が生じると説明している (p. 59)。

この義務的 (根源的) 意味から認識的意味への変化は、多くの助動詞の意味変化に当てはまり、かなり一般性の高い傾向であると言えるが、この傾向が全ての助動詞の意味変化に当てはまるとは言い難い。ここでは、英語の *may* と *can* をこの単方向性仮説に対する反例として取り上げ、それに代わる説明としてスコープ (scope) に基づく単方向性を提案したい。

2. *may* と *can* の通時的変化 (概観)

may と *can* の意味変化を最も分かりやすい形で表わしたのが、以下の Visser (1969 : §1768) の表である (表では通時的変化が上から下へと表されている)。

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)



この図の *may* の意味変化に注目してみると、*may* の「許可」の意味は「可能性 (eventuality)」の意味の後に現れていることが分かる。これは「許可を表す根源的意味」から「可能性を表す認識的意味」への意味変化を前提とする Sweetser の説明の逆になる。

OED では、*may* の「可能性 (客観的可能性)」の意味の初出は 9 世紀終わり頃であり、「許可」の初出は 1000 年頃である。

- (1) Hu ma3 ðær þonne sumderlice anes rices monnes nama cuman?
(c888 Ælfred *Boeth.*, OED *may* B3 'objective possibility')
'How, then, can any great men's name singly come there?'

(2) Oft mæg se þe wile in his sylfes sefan soþ þencan.

(a1000 *Exeter Book*, OED *may* B4 'permission or sanction')

'He who will can often reflect upon this truth in his own heart.'

また、OED の *can* の「可能性」の初出は 16 世紀であり、「許可」の初出は 19 世紀後半である。

(3) Thou cannest not haue of Phocion a frende & a flaterer bothe to gether.

'You cannot (It is not possible to) have of Phocion both a friend and a flatterer both.'

(1542 Udall *Erasm. Apoph.*, OED *can* B6a 'possibility')

(4) Can I speak with the Count?

(1879 Tennyson *Falcon*, OED *can* B6b 'to be allowed to')

このように見ると、*may* と *can* の意味変化を単純に義務的 (根源的) 意味から認識的意味への変化として特徴付けるのは早計である。確かに、2 つの助動詞がそれぞれ「肉体的能力 (*magan* 'have power')」、「知的能力 (*cunnan* 'know')」の意味を原義としていたことを考えると、「能力」という根源的意味から認識的意味への変化があるとは言えるかもしれないが、Sweetser が説明するように「許可」から「可能性」の意味を説明するのは、歴史的事実に合わない¹。

また、さらに問題なのは、「可能性」という概念の多義性である。Visser や OED では「可能性」には、客観的可能性 (objective possibility) と主観的可能性 (subjective possibility) の 2 つがあるとし、前者を「妨げとなるような条件が存在しないこと (absence of prohibitive conditions)」、後者を「ある想定の内容認可能性 (admissibility of supposition)」と説明しているが、この違いは不明瞭である。これら 2 つの意味の明確な特徴付け無しに、*may* と *can* の意味変

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

化について正確に説明することは困難である。

以下では、2つの可能性の意味の特徴付けを提案し、それを基に *may* と *can* の意味変化を説明する。

3. 「可能性」の2つの意味

現代英語における *may* と *can* の「可能性」の意味は相補的で、主に *may* は主観的可能性を、*can* は客観的可能性を表わす。イギリス英語を調査した Coates (1980、1983) の研究では、主観的可能性を表わす *can* の例は一例も見られず、客観的可能性を表わす *may* の例は7例しか見られなかった（これは *can* の 1/20 に当たる）。また、Myhill (1995) によると、アメリカ英語では南北戦争頃に *may* の客観的可能性の意味が消失している²。従って、「主観的可能性」と「客観的可能性」の違いは、現代英語における *may* と *can* の「可能性」の意味にほぼ対応すると考えられる。

may と *can* の「可能性」の意味はそれぞれ次のような形でパラフレーズされる (Leech 1987 [1971]: 81)。

MAY: 'It is possible that'

CAN: 'It is possible for NP to do....'

例えば、*The road may be blocked* (= 'It is possible that the road is blocked') という文は、現在の状況から判断して（例えば、洪水が起こったなど）道路が封鎖される可能性があることを意味するのに対し、*The road can be blocked* (= 'It is possible for the road to be blocked') は、問題となる道路の性質上封鎖可能であることを意味する。

このような違いに基づき、井筒 (2002) では2つの可能性の意味を以下のように特徴づけた。

(5) 主観的可能性 (ModE. MAY) : the POSSIBILITY of an event

「出来事が起こる可能性」

客観的可能性 (ModE. CAN) : one of the POSSIBLE properties of an entity

「実体を持つ性質としての可能性」³

すなわち、「主観的可能性」は「出来事が起こる可能性」を表すのに対し、「客観的可能性」は「実体を持つ性質としての可能性」を表す。以下で示すように、「可能性」の意味は「客観的可能性」から「主観的可能性」へと歴史的に変化してきた。つまり、*may* も *can* も始めは主語名詞句が表す実体(以下、主語 NP)が持つ能力の意味を表わしていた。それが次第に主語 NP が持ち得る特性(客観的可能性)を表わすようになり、その後出来事全体の可能性(主観的可能性)を表わすようになった。この事実を考えると、これらの助動詞の変化は一つのスコープ(scope)の変化として特徴づけられる。始めは主語 NP の能力や可能性という狭いスコープを表わしていたものが、次第に出来事全体をスコープとするようになる。つまり、「狭いスコープから広いスコープへの変化」である。次節では、*may* と *can* の意味変化の具体例を見ながら、このスコープに基づく変化の方向性について考察する。

4. *may* と *can* の通時的変化 (具体的考察)

4.1. *may*

本来、*may* (OE *magan*) は主語 NP の「肉体的能力」を表わす本動詞であった (Visser 1969 : §1622, 小野 1969 : 156, Tanaka 1990 : 91)。

(6) Hu mæg he? Hi cwædon þæt he wel mihte.

(c. 1000 Ælfric *Genesis*: 29-6)

'Is he well? And they said that he was well.'

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

また、しばしば不定詞を伴い、‘to have power to do (be able to do)’、という意味を表わした。これが助動詞としての用法の始まりである。

- (7) Ic þæs Hroðgar mæg þurh rumne sefan ræd gelæran (*Beowulf*: 277)
‘I can (am able to) give Hrothgar good counsel about this.’

(7)に見られる *may* の「能力」を表わす用法は 17 世紀頃消失し (Visser 1969 : §1653)、現代英語では *can* がその役割を果たしている。

2 節で述べたように、古英語期には既に *may* の「客観的可能性」を表わす用法が見られた。

- (8) Sinc eaðe mæg,/ gold on grund(e) gumcynnes gehwone / oferhigian
hyde se ðe wylle! (*Beowulf*: 2764)

‘Treasure, gold in the ground, can easily get the better of one of human race, hide it who will!’

- (9) Hwæt, þæt secgan mæg / efne swa hwylc mægþa swa ðone magan
cende / æfter gumcynnum, gyf heo gyt lyfað,/ þæt hyre Ealdmetod
este wære /earngebyrdo. (*Beowulf*: 942)

‘Lo! she may say, whoever was the woman who gave birth to that son among the tribes of men, if she still lives, that the eternal God has been gracious to her in her child-bearing.’

- (10) þæt, la, mæg secgan se ðe wyle soð specan, (*Beowulf*: 2864)
‘Lo! this can he say who wills to speak to the truth’

(8)の *mæg* の主語は無生物 (treasure) であり、無生物が「能力」を発揮することは出来ない。従って、この *mæg* は「能力」というより、無生物主語が持つ「性質としての可能性」を表わしている。また、(9)と(10)は共に人が主語となっているが、小野 (1969 : 165) が指摘するように、これらの例でも *magan* は「客観

的可能性」を表わすと考えられる。(9)では、「あの息子を産んだ女性が誰であろうと、その女が生きているのなら……と言うだろう」というように、主語 NP の特性を強く示唆する内容が挿入部分によって表わされている。また、(10)でも主語 NP を修飾する関係節の内容から主語 NP の特性が強く示唆される。従って、これらの例で *magan* は「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わしていると言える。

さらに、*magan* は「(主語 NP 以外の) 実体を持つ性質としての可能性」も表わしていた。(11)では、主語が表現されていない。従って、*mæg* は主語 NP が持つ「能力」や「性質」を表わしているとは言えない。むしろ、この文では先行する *pær* が表わす場所 (具体的には妖怪 Grendel とその母親の棲家) が持つ特徴を描写している。(12)も同じである。ここでは、*miht* の主語は *þu* (ベオウルフ) であるが、ベオウルフがその罪深きものを見つける可能性は彼の能力や性質によるものではなく、むしろ外的状況、特に関係副詞 *ðær* の先行詞 *frecne stowe* (the perilous place) の性質によるところが大きい。

(11) *pær mæg nihta gehwæm niðwundor seon, / fyr on flode.*

(*Beowulf*: 1365)

‘There one may see a fearful wonder each night - fire on the flood.’

(12) *Eard git ne const, / frecne stowe, ðær þu findan miht / sinnigne secg; sec gif þu dyrre!*

(*Beowulf*: 1378)

‘Thou knowest not yet the perilous place, where thou mayest find the sin-stained being. Seek it if thou darest!’

これらの例から古英語期には、*may* は「(主語 NP 以外の) 実体を持つ性質としての可能性」を表わしていたと言える。この「(主語 NP 以外の) 実体」とは前後の文脈で明示されている「具体的状況」を指す。従って、*may* は「具体的状況における可能性」を表わしていたとも言える。

Visser (1969: §1663) は、「主観的可能性」は「客観的可能性」から意味変化

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

したものであると述べているが、次の例では、この「主観的可能性」への移行がうかがわれる。

- (13) Soðfestemen heom kepten on nihtes, sæidon þes þes þe heom puhte
þ þær mihte wel ben abuten twenti oðer þritti horn blaweres.

(*Anglo-Saxon Chronicle* [E] 258/25)

‘Truthworthy men noticed (themselves) at night, said from what seemed to them that there might well be about twenty or thirty horn-blowers.’

- (14) þah he beo god, me hine mai misfonge / An drahe hine to sothede
(c. 1250 *The Owl and the Nightingale*: 1374)

‘Although it may be good, one may misapply it and convert it to folly’

(13)の *mihte* は *there* 構文の中に現れており、「能力」や「性質」を持つ主語 NP が存在しない。さらに、(11)や(12)と違い、特定の性質を帰属させる主語 NP 以外の実体、すなわち具体的状況も存在しない。従って、ここでは「現在の状況から見た可能性」（この例では、男達が語った時点での可能性）を表わしていると言える。(14)も同様で、ここでは不定代名詞 *me* (one) が主語になっており、この主語 NP には特定の「能力」や「性質」を帰属させることが出来ない。従って、この文で *mai* が表わす可能性もやはり「現在の状況から見た可能性」となる。この現在の状況から話者が判断した可能性は、明らかに「主観的可能性」である。「主観的可能性」において、ある出来事が可能であるとの認識に至らしめるのは、その場の状況に関する話者の知識である。

ここまでのところをまとめると、*may* の意味変化は次のように説明される。つまり、本来「主語 NP の能力」を表わしていた *magan* が、次第に「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わすようになり、さらに「(主語 NP 以外の実体が持つ性質としての可能性 (具体的状況における可能性))」を表わし、つい

には「現在の状況から見た可能性 (=主観的可能性)」を表わすようになった。既に述べたように、「主観的可能性」は出来事(命題内容)が起こる可能性であるから、この *may* の一連の意味変化は「狭いスコープから広いスコープへの変化」と考えることが出来る。

同様に、*may* の「許可」の意味にもスコープの変化が見られる。Visser(1969: §1661) や Bybee (1988: 256) などによると、*may* の「許可」の意味は「客観的可能性」の意味から生じたと言われている。

- (15) Eueriche urideie of ðe 3er; hodeð silence.... to owr meiden 3e muwen pauh siggen mid lut wordes; hwat se wulleð.

(a1225 *Ancrene Riwe* 188/15)

'Every Friday of the year; keep silence.... To your maid, however, you may say, in a few words, what you will.'

ここでは、「毎週金曜日は黙っていなければならないが、自分の召し使いに対しては好きなことを少し言うことができる」というように、主語 NP 以外の実体(召し使い)の性質上、特別に「話す」という出来事が可能になることを意味する。従って、一種の客観的可能性ともとれるが、主語が *3e* (you) になっていることから、話者が与える「許可」とも解釈可能である。

さらに、特定の性質を帰属させる実体が存在しない文脈では、*may* ははっきりと「許可」の意味を表わす。この意味は、特に *may* が被伝達部に含まれる場合や *may* の主語が *you* である場合(疑問文では主語が *I* である場合)に生じ易い。つまり、出来事を可能にするのが話者や伝達部の主体であると感じられる場合に、「許可」の意味に解釈されるのである。

- (16) ealle þa ærcebiscopes 7 biscopes seidon þ hit wæs togeanes riht. 7 þ he ne mihte hafen twa abbotrices on hande.

(*Anglo-Saxon Chronicle* [E] 25/26)

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

'all the archbishops and bishops said that it was against law, and that he could not have charge of two abbeys in his possession.'

(17) May I nat axe a libel, sire somonour...?

(c. 1387 *The Canterbury Tales* III 1595)

'May I not ask a written copy of the charge, Sir summoner...?'

これまで見てきた「許可」の例では、主語 NP は人であった。この段階では、「許可」の対象は主語 NP であり、この主語 NP が「許可」された事柄を実行する。しかし、「許可」の意味が定着するにつれ、*may* が無生物の NP を主語とする場合も見られるようになった。(18)はこの例の OED の初出である。

(18) Illusory deceits may not bee done though to a good end.

(1646 J. Hall *Horæ Vac.* 129)

(19) Periodicals may not be removed from the reading room.

(19)で「不許可 (= 禁止)」の対象となっているのは、主語 NP の periodicals ではない。むしろ、ここでは「定期刊行物を図書室から持ち出す」という出来事全体が禁止されている。従って、この無生物主語をとる「許可」の用法は「広いスコープへの変化」を意味する。

4.2. can

can は *may* の意味変化を辿るような形で、新しい語義を獲得している。本来、*can* (OE *cunnan*) は主語 NP の「知的能力」を表わす本動詞であった (Visser 1969 : §1622, 小野 1969 : 156, Tanaka 1990 : 91)。

(20) Ic hine cupe cnihtwesende

(*Beowulf*: 372)

'I knew him when he was a youth.'

また、しばしば不定詞を伴い、‘to know how to do’という意味を表わした。これが助動詞としての用法の始まりである。

- (21) Men ne cunnon secgan to soðe (Beowulf: 50)
 ‘Men know not how to say truly.’

小野(1969: 160)は、古英語期には現代英語に見られる「一般的能力 (be able to)」を表わす用法は見られず、(22)がこの用法の最初の例であると述べている。

- (22) So yung þat sho ne coupe Gon on fote. (a1300 Havelok 111)
 ‘so young that she was not able to go on foot’

また、*may* と同じく、主語 NP の「能力」を表わす用法から、「主語 NP が持つ性質としての可能性」の意味を発達させた。この用法は中英語期ではまれだが、以下のように主語 NP の「能力」に左右されない状態動詞が用いられている場合には、この「客観的可能性」を表わす例として解釈できる。

- (23) For who kan be so buxom as a wyf?
 (c. 1387 *The Canterbury Tales* IV 1287)
 ‘For who can be so obedient as a wife?’

- (24) Allas! And konne ye been agast of swevenys?
 (c. 1387 *The Canterbury Tales* VII 2921)
 ‘Alas! and can you be afraid of dreams?’

現代英語になると「可能性」の意味では、「客観的可能性」を表わす例がほとんどである。

- (25) a. This illness can be fatal.

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

- b. Children can be a great nuisance.
- c. A friend can betray you.

この場合「主語 NP が持つ性質としての可能性」を表わすことが多いが、しばしば *there* 構文や不定代名詞が主語となる文で「(主語 NP 以外の) 実体を持つ性質としての可能性」を表わす場合もある。

- (26) a. At Odeon Cinema, there can be a film I want to see.
- b. It can be bitter cold in Carlyle.
- c. In the Court of Justice, one can be prohibited from speaking for some reasons.

(26)に挙げた文の主語 NP は全て、*there* や非人称の *it* のような特定の性質を持つことが出来ないものである。ここでは、前後に現れる前置詞句内の NP (オデオンシネマやカーライルなど) が持つ性質についての可能性を表わす。これらの前置詞句は具体的状況を表わすので、先程見た(11)や(12)と同じく、この場合も「具体的状況における可能性」を表わしていると言える。

既に3節で触れたように、現代英語において *can* は「主観的可能性」の意味をほとんど表わさない(*may* がその役割を果たしている)。しかし、以下に示すような場合には、「主観的可能性」として解釈することが可能である。

- (27) FLORIDA BIKINI TEAM
ADVERTISING THAT WORKS!
WE NEED MODELS
Don't be fooled by imitators!
There can be only 1!

(from the web page of the FLORIDA BIKINI TEAM)

- (28) a. He can't be working at this hour!

b. He cannot have told a lie.

(29) We hope this coding system can be useful. (Coates 1995: 63)

(27)では、特定の性質を帰属させることが出来るような主語 NP 以外の実体、すなわち具体的状況は存在しない。ここで「一つしか有り得ない！」というのは、There can be only 1! (in the world) と補うと分かるように、この世において一つしか有り得ないのである。従って、ここでは、この世の中における可能性(つまり、現在の状況から判断した可能性)を表わしているので、「主観的可能性」の意味を表していると解釈することも可能である。また、(28)のような否定の用法の場合には、完全に「主観的可能性」の意味を発達させている。Coates(1983: 101)が言うように、この否定の用法は、認識的意味の *must* の否定と考えることが出来る⁴。また、(29)のように、*I hope* などの主観的表現に続くような場合にも「主観的可能性」の解釈が可能である⁵。

can はこのような特定な環境でしか「主観的可能性」の意味を表わすことが出来ないということを考えると、*can* は *may* と比べると限られた形でしか「狭いスコープから広いスコープへの変化」が進んでいないと言える。

最後に、*can* の「許可」の意味についてだが、この意味での OED の初出は 19 世紀後半である。この「許可」の用法もやはり *may* と同じく、肯定文では *you* (疑問文では *I*) が主語となる場合に「許可」の意味として解釈され易い。

(30) a. Can I speak with the Count? (=4)

b. Father says you can come.

(T. B. Reed, *Dog with Bad Nature* xv. 156)

現代英語においても、ほとんどが人を主語とし、「許可」の対象がその主語 NP である場合が多いが、中には(31)のように無生物主語になる場合もある。

(31) Pencils can be red. (鉛筆は赤でも良い。)

may と can の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

この場合、先程の(18)や(19)と同じく、許可されているのは無生物主語 (*pencils*) ではなく、出来事全体である。従って、この無生物主語を取る「許可」の用法は「狭いスコープから広いスコープへの変化」を示していると言える。

4.3. may と can の意味変化のまとめ

これまで見た *may* と *can* の意味変化をまとめると、以下のようなになる。

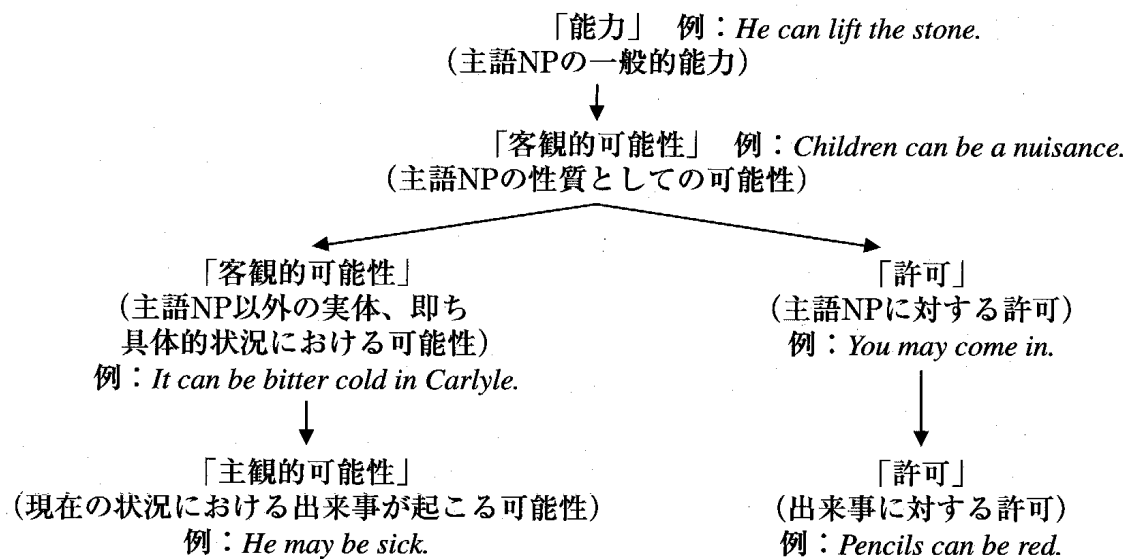


図1：may と can の意味変化

この図から明らかなように、「可能性」と「許可」の意味それぞれに「狭いスコープ」を取る用法と「広いスコープ」をとる用法がある。「許可」については、*may* と *can* 両方とも「広いスコープ」をとる用法が確立しているが、「可能性」については、*can* は(27)~(29)で見たような狭い条件下でしか「広いスコープ」をとる用法(主観的可能性)を表わすことが出来ない。従って、*may* は「可能性」と「許可」両方の意味において「狭いスコープから広いスコープへの変化」が生じたと言えるが、*can* の場合「可能性」の意味では完全にこの変化に移行したとは言い難い。

5. 「狭いスコープから広いスコープへ」——その一般性について

5.1. その他の助動詞

助動詞の文法化についてはこれまで義務的意味から認識的意味への単方向性 (unidirectionality) が指摘されてきたが、この一般化は *may* と *can* の意味変化を十分に説明出来ないということを2節で指摘した。前節では、この「義務的→認識的」という方向性よりも、むしろ「狭いスコープ→広いスコープ」という方向性の方がその歴史的発達を的確に捉えることが出来るということを示した。

この「狭いスコープから広いスコープへ」という変化は、*may* と *can* に限らず、英語のその他の助動詞に当てはまる。既に Nordlinger and Traugott (1997) は、これまで文法化の議論の中核をなす2つの方向性(「義務的法性と認識的法性」と「主体性の程度」)に加え、*ought to* の意味変化には「スコープに基づく方向性」が重要であることを示している。

また、その他の助動詞についても同様の傾向が見られる。例えば *will* は助動詞としては始め主語の意志や習性を表わしていた。後に、*This will be the Tower of London, I suppose?* のような純然たる推量を表わす用法が発達したが、この用法は標準英語では19世紀まで見られなかった (Traugott 1989: 43)。 *must* は許可の意味を表わす **motan* の過去形 (*moste*) に由来するが、義務の意味は15世紀、推量の意味は17世紀頃に確立した (OED *must*, 小野 1969: 155, Traugott 1989)。これらの助動詞のように、始め主語の意志や主語への許可を表わしていたものが後に推量の意味を表わすようになったということは、一種の「狭いスコープから広いスコープへ」の変化と考えられる。

さらに、擬似助動詞 *need to* と助動詞 *need* は、現代英語においてまさにこの変化の過程を示している。数の一致や否定辞の位置から分かるように、*need to* は *need* よりもかなり本動詞的性格を残している。

may と *can* の意味変化：もう一つの単方向性 (井筒(成田)美津子)

- (32) a. The hedge doesn't need to be trimmed.
b. The hedge needn't be trimmed this week.

(32)の2つの文は共に生け垣を刈る必要性がないことを表わしている。(32 a)は生け垣自体があまり伸びていないなど、「主語 NP の性質」からくる不必要性を表わす(これは *need to* の数が主語に一致するという統語的事実とも関係する)。一方、(32 b)は主語 NP の状態はともかく、話者が「生け垣を刈るという出来事」を行う必要性を感じていないことを表わす(Leech 1987 [1971]: 102)。つまり、前者は主語 NP の性質に関する「狭いスコープ」の必要性、後者は出来事全体に関する「広いスコープ」の必要性を表わす。*need* は *need to* よりも文法化が進んでいることから、ここにも「狭いスコープから広いスコープへ」の方向性が見られる。

5.2. 接続詞の発達

「狭いスコープから広いスコープへの変化」は助動詞に限らない。ここでは、この単方向性が接続詞の発達にも見られることについて簡単に触れる。接続詞の発達にはいくつかの傾向があるが、そのうちの1つに前置詞からの発達がある (Braunmüller 1978)。

- (33) þu eart seo snyttro þe þas sidan gesceaft mid þi waldende worhtes ealle. For þon nis ænig þæs horsc, ne þæs hygecræftig, þe þin fromcyn mæge fira earnum sweotule geseþan. (ChirstA 239)
'You are the wisdom who built the wide world with your lord. Therefore/For none is so wise and cunning of mind that (s/he) may manifestly declare your origin to the children of men.'

(33)は古英語の接続詞 *for* の用法である。この例から明らかなように、前置詞から発達した接続詞は、始め「前置詞+指示代名詞 *se* の変化形」という形で用いら

れた (Mitchell 1985 : 346)。この形式において、前置詞に後続する指示代名詞は前の節の意味内容を指す働きをしていた (*You are the wisdom who built the side world with your lord: For that, none is so wise and cunning...*)。

このように後ろに指示代名詞を従えている段階では、まだ名詞句を導く前置詞として用いられており、狭いスコープをとる。しかし、(34)のように指示代名詞が消え、接続詞の用法が確立すると、接続詞は直接、節を従える。従って、広いスコープをとる。

(34) In al this world ne was ther noon hym lik, / To speke of phisik and surgerye, / For he was grounded in astronomye.

(c. 1387 *The Canterbury Tales* I(A): 412)

‘There was no one like him in this world, on points of medicine and surgery, for he was grounded in astronomy.’

同じように、前置詞 (句) から発達した接続詞に *after*、*before*、*but*、*because* などがあるが、これらの接続詞も全て *for* と同じく「狭いスコープから広いスコープへの変化」を経たと言える。

6. まとめ

本稿では、「義務的意味から認識的意味へ」という助動詞全般に言われる一般化が、*may* と *can* の意味変化を十分に説明出来ないということを指摘した上で、この一般化に代わる単方向性を提案した。ここで提案した「狭いスコープから広いスコープへ」という方向性は、Bybee and Pagliuca (1985) や Bybee (1988) が主張する「行為者志向の法助動詞 (agent-oriented modality) から認識的助動詞 (epistemic modality)」という一般化と重複する部分も多い。しかし、彼等の一般化は、「許可」の意味への変化を上手く説明出来ない上、法助動詞以外の歴史的变化 (例えば前節で見た接続詞の発達) などには当てはまら

ない。従って、一般化という点では、「スコープ」に基づく説明の方がより汎用性が高いと言える。Nordlinger and Traugott (1997: 295) が主張するように、この「狭いスコープから広いスコープへ」という歴史的变化は、言語発達の新たな単方向性を示すと考えられる。

註

- ¹ Traugott(1989)は、*may* と *can* を助動詞の意味変化の説明から除いている。また、Sweetser (1990) は註 (Ch. 3, n. 16) において「許可」の意味が「可能性」の意味より歴史的に後発であるということを認めているが、本文では一貫して「可能性」の意味は「許可」の意味から比喩的拡張によって派生されるものであると議論している。
- ² Coates(1980、1983)と Myhill(1995)は、「主観的可能性(subjective possibility)」と「客観的可能性(objective possibility)」をそれぞれ「認識的可能性(epistemic possibility)」と「根源的可能性(root possibility)」と呼んでいる。
- ³ ここで言う「実体(entity)」とは、Langacker (1987、1991) の認知文法で用いられているものとは異なる。ここでの「実体(entity)」は、Langacker の thing に当たる。
- ⁴ 何故否定形が「主観的可能性」の意味を発達させたのかについては、興味深い問題である。この理由としては、否定が‘non-assertiveness’という話者の心的態度を表わす法性を担っている (Palmer 2001 [1986]: 13) ことが関係すると考えられるが、この点についてはさらに具体的な考察が必要である。
- ⁵ Coates (1995: 63) は、このような例はアメリカ英語では可能だが、イギリス英語では不可能であると述べている。

参考文献

- Braunmüller, K. 1978. Remarks on the Formation of Conjunctions in Germanic Languages. *Nordic Journal of Linguistics* 1: 99-120.
- Bybee, J. L. 1988. Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning. *BLS* 14: 247-264.
- Bybee, J. L. and W. Pagliuca. 1985. Cross-linguistic comparison and the development of grammatical meaning. In J. Fisiak (ed.) *Historical Semantics: Historical Word Formation*, 59-83. Berlin: de Gruyter.
- Coates, J. 1980. On the non-equivalence of MAY and CAN. *Lingua* 50: 209-220.
- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London & Canberra: Croom Helm.
- Coates, J. 1995. The expression of root and epistemic possibility in English. In J. Bybee and S. Freischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, 55-66. Amsterdam: John Benjamins.
- 井筒 (成田) 美津子. 2002. *may と can — 「可能性」の2つの可能性*. 『文化と言語』第56号: 1-16.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Leech, G. N. 1987 [1971] *Meaning and the English Verb*. 2nd edn. London: Longman.
- Mitchell, B. 1985. *Old English Syntax* Vol. II. Oxford: Clarendon Press.
- Myhill, J. 1995. Change and continuity in the functions of the American English modals. *Linguistics* 33: 157-211.

- Nordlinger, R. and E. C. Traugott. 1997. Scope and the development of epistemic modality: evidence from *ought to*. *English Language and Linguistics* 1(2): 295-317.
- OED=Oxford English Dictionary. 1989. Oxford: Clarendon Press. 2nd edn.
- 小野 茂. 1969. 『英語法助動詞の発達』 東京：研究社.
- Palmer, F. R. 2001 [1986] *Mood and Modality*. 2nd edn. Cambridge: CUP.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: CUP.
- Tanaka, T. 1990. Semantic change of CAN and MAY: differentiation and implication. *Linguistics* 28: 89-123.
- Traugott, E. C. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31-55.
- Traugott, E. C. 1995. Subjectification in grammaticalisation. In D. Stein and S. Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic perspectives*, 31-54. Cambridge: CUP
- Visser, F. Th. 1969. *An Historical Syntax of the English Language*. Vol. III. Leiden: E. J. Brill.